

# 『天草版平家物語』『天草版エソボ物語』における授受動詞について

李 晶

キーワード：『天草版平家物語』、『天草版エソボ物語』、授受動詞、本動詞用法、補助動詞用法

## 要 旨

本稿は『天草版平家物語』『天草版エソボ物語』に用いられる授受動詞の使用状況を明らかにしようとするものである。両資料における授受動詞(アタエル、クダサル、クレル、シンズル、タテマツル、タマワル、トラス、マイラス、ヤル)と見られる語彙を比べると、語彙は一致している。しかし、各語の意味や用法を見ると、両資料の間にずれがある。アタエル、クダサル、クレル、シンズル、タマワル、マイラス、ヤルについては両資料で用法に差が見られる。こうした差異からみると『天草版エソボ物語』における授受動詞の用法のほうが現代日本語により近いと考えられる。

## 1. はじめに

『天草版平家物語』(1592年刊)『天草版エソボ物語』(1593年刊)(以下『ヘイケ』『エソボ』と略す)に見られる9種の授受動詞を比較すると、語彙には差が見られないが、両資料において異なる意味・用法で用いられる授受動詞もある。

本稿は『ヘイケ』と『エソボ』における授受動詞の意味・用法を比較・整理し、相違点を指摘することを目的とする。両資料における授受動詞の使用状況を記述した上で、具体的にどのような差異があるのかをまとめる。

なお、本稿でいう授受動詞は広義的概念のものであり、本動詞用法で「物の所有権の移動」を表す動詞を「授受動詞」と見なす。また、授受動詞には連用形接続形

式またはテ形接続形式<sup>\*1</sup>で他の動詞に後接し、「(前接動詞の)行為による恩恵の移動」という意味を表す用法がある。本稿は、この用法は授受動詞の補助動詞用法と見なす。語によって、補助動詞用法のある動詞とない動詞がある<sup>\*2</sup>。

## 2. 先行研究

『ヘイケ』『エソポ』の授受動詞に関する先行研究には、宮地(1975)、古川(1995)(1996)、荻野(2005)(2006)(2007)、吉田(2008)(2010)などが挙げられる。その中で、『ヘイケ』の授受動詞を対象に詳しく調査したのが吉田(2008)(2010)である。ただし、後述するように、本稿とは用例の解釈や認定において異なる点もある。さらに、『ヘイケ』と『エソポ』における授受動詞の比較に関する先行研究は管見の限り見当たらない。

## 3. 資料

本稿の調査ではテキストとして、近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ(1999)『天草版平家物語 語彙用例総索引(1)』(勉誠出版)と大塚光信・来田隆(1999)『エソポのハプラス 本文と総索引 本文篇』(清文堂出版)を使用した。なお、以下に挙げる用例の表記は使用テキストの翻字によるものであり、用例に原文の頁数と行数を示した。

## 4. 授受動詞の語彙

両資料に見られる授受動詞の語彙をまとめると表1のようになる。

---

\*1 連用形接続形式は「実質的な動作を表す動詞連用形+文法概念を表す動詞」形式、テ形接続形式は「実質的な動作を表す動詞連用形+テ+文法概念を表す動詞」形式を指す。「連用形接続形式」、「テ形接続形式」の定義に関しては、坪井(2005)、(2007)を参照。

\*2 形態上は補助動詞用法であっても、実際に表している意味は「(前接動詞の)行為による恩恵の移動」ではない動詞もある。例えば、タテマツルは謙讓語としての補助動詞用法の用例が多数あるが、これは考察対象としない。

表1 『ヘイケ』『エソボ』における授受動詞の語彙<sup>\*3</sup>及び用例数

	ア タ エ ル	ク ダ サル	ク レ ル	シ ン ズ ル	タ テ マ ツ ル	タ マ ワ ル	ト ラ ス	マ イ ラ ス	ヤ ル
ヘイケ	3	54	2	7	10	16	6	10	2
エソボ <sup>3</sup>	12	19	6	1	5	2	1	3	6

両資料における授受動詞の語彙は共通である。その中で、シンズル、タテマツル、タマワル、トラス、マイラスは現代日本語(以下「現代語」と略す)で用いられないため、古代日本語(以下「古代語」と略す)の語彙であると考え。それに対し、アタエル、クダサル、クレル、ヤルは現代語でも使われるため、現代語の語彙であると考え。両資料における授受動詞は古代語の語彙と現代語の語彙が混在している状態である。

次に、用例の多寡を見ると、クダサル、シンズル、タテマツル、タマワル、トラス、マイラスは『ヘイケ』での用例が多い。アタエル、クレル、ヤルは『エソボ』で多く使用されている。両資料の本文の頁数は『ヘイケ』が406頁、『エソボ』が93頁である。『ヘイケ』の分量は『エソボ』の4倍以上であり、クダサル、シンズル、

\*3 表1の数字は、両資料に見られる各動詞の全用例数から非授受動詞用法の用例をはずし、授受動詞の用例だけを示したものである。非授受動詞用法とは実質的動作を表す用法(例: ヤルは「行かせる、派遣する」の意味を表す)や特定の意味を表す用法(例: 「暇を取らず」は「主従関係を解消する」意味を表す)など、物の所有権の移動に関わらない用法を指す。参考のために、各動詞の全用例数を以下に示す。「;」の左側は『ヘイケ』、右側は『エソボ』の用例数である。

アタエル(3; 12) クダサル(54; 19) クレル(5; 6) シンズル(7; 1) タテマツル(230; 14) タマワル(16; 2) トラス(8; 2) マイラス(36; 3) ヤル(25; 10)

また、両資料にはアゲル、サシアゲル、イタダク、モラウの用例もある。アゲル、サシアゲル、イタダクはいずれも実質的な動作を表す用例であり、モラウは「物の所有権の移動」を表すことにより、物を乞い求めるのに用いられたため、授受動詞の用法としては扱わない。

タテマツル、タマワル、トラス、マイラスの用例が『エソポ』より『ヘイケ』のほうが多いのは分量の違いによると説明できる。しかし、アタエル、クレル、ヤルは『ヘイケ』より『エソポ』のほうで多用され、『エソポ』で積極的に使われているように見える。

また、『エソポ』における各動詞の用例数を見ると、アタエル、クダサル、クレル、ヤルは、シンズル、タテマツル、タマワル、トラス、マイラスより、用例が多い。『エソポ』には現代語の語彙(アタエル、クダサル、クレル、ヤル)が古代語の語彙(シンズル、タテマツル、タマワル、トラス、マイラス)より多用されているように見える。

以下では両資料における各授受動詞の意味と用法に着目して詳しく見てみる。

## 5. 授受動詞の意味と用法

本節では、『ヘイケ』『エソポ』において各授受動詞がどのように使われているのかを記述する。各語の意味と用法の判断は、文の構造(ガ格、ニ格が出現しているかどうか)、文末のモダリティ、本文中の前後の文脈に基づいて行った。なお、文脈の意味を把握するために、『ヘイケ』の底本百二十句本『平家物語』、『エソポ』と共通の祖本を持つとされている古活字本『伊曾保物語』\*4も参考した。各授受動詞は地の文に使われる場合に、発生した物の所有権の移動を描写する用例が多い。会話文の場合に、発話者が授受関係者の与え手であるか聞き手であるかによって、相当する現代日本語の意味が変わってくる。以下の記述では、地の文を視野に入れながら、会話文を中心に両資料における授受動詞の意味、用法の異同を述べる。地の文の用例に特に言及しない時には、両資料における地の文の用法に相違点が見られないということである。なお、『ヘイケ』は喜一検校(語り手)・右馬之允の対話形式であるが、検校の語りの部分を基本的に地の文と見なす。

### 5.1. アタエル

アタエルは両資料において本動詞として使われている。

---

\*4 テキストとして、百二十句本『平家物語』は水原一校註(1979-1981)『平家物語(上中下)』新潮社、古活字本『伊曾保物語』は前田金五郎・森田武校註(1975)『仮名草子集』を使用した。

『ヘイケ』におけるアタエルは3例あり、3例とも受け手(受け手側人物)の発話に用いられている。

- (1) これは義経に天の与ゆる文ぢゃ 『ヘイケ』331 - 4  
(2) 幼い者に左右なう恥辱を与へられたことは遺恨の次第ぢゃ  
『ヘイケ』15 - 17

(1)の発話者「義経」は「文」の受け手であり、二格に置かれている。(1)は「これは天が義経にくれた文だ」という意味である。そして、(2)の発話者は「清盛」で、「恥辱を与えられた」資盛の祖父に当たる人物である。(2)のアタエルは受身形で用いられている。(1)(2)のように、『ヘイケ』におけるアタエルは「天からの文」や「恥辱」のような限られたものの授受に使われている。さらに、アタエルが連体修飾成分として使われ、発話者が聞き手に対し、物を求めたり、提供したりのような用例が見られない。

それに対し、『エソポ』におけるアタエルは与え手が発話者になっている用例と、受け手が発話者になっている用例がある。(3)は「財宝半分を与えよう、あげよう」、(4)は「相応しい主人をください」という意味である。

- (3) その上に財宝半分を与へうずる』と約束せられた。 『エソポ』419 - 16  
(4) しかるべい主人を与へ下されい』と申すによって 『エソポ』454 - 14

(3)は発話者「シャント」が聞き手「エソポ」に「財宝半分」を提供しようとする用例であり、(4)は発話者「蛙」が「天」に「主人」を求めている。ただし、(4)のアタエルはクダサルと一緒に使われており、クダサルも「求める」機能を果たしていると思われる。『エソポ』におけるアタエルは、「発話者=与え手」[用例(3)]の用例が8例、「発話者=受け手」[用例(4)]の用例が2例、地の文が2例である。

両資料におけるアタエルの異同をまとめると、同じなのは「発話者=受け手」の用例が見られることであり、異なるのは『エソポ』だけに「発話者=与え手」の用例が見られ、その用例数が半分以上を占めることである。

## 5.2. クダサル

クダサルは両資料において本動詞用法と補助動詞用法の用例が見られる。

まず、『ヘイケ』においてクダサルの本動詞用法に「発話者=受け手」、「発話者

=与え手」の用例が見られる。(5) (6)は「発話者=受け手」の用例である。

(5) お文をも下されいと、申したれば 『ヘイケ』84 - 7

(6) 義盛さらばお旗を下されて向かはうずと申す： 『ヘイケ』339 - 13

(5) (6)は受け手が与え手に対して、物を求める場面である。(5)は「有王」が「俊寛の娘」に対して「文」を求め、「手紙をください」という意味である。(6)の発話者「義盛」は「旗」の受け手であり、聞き手の「義経」は与え手である。しかし、(6)のクダサルの主語が確定できないため、(6)は「さらば旗をいただいて向かおうぞ」という意味かまたは「さらば旗を下さって向かおうぞ」という意味が明白ではない。

また、次に挙げる(7)は与え手からの発話である。

(7) 所知下されうずるとて、 『ヘイケ』321 - 19

(7)は「頼朝→池殿」の発話であり、「所知」の移動は「頼朝→宗清」である。頼朝は宗清が池殿と一緒に関東に下ると予想し、宗清に所領を与えようと考えていたようである。(7)は「所領を与えよう、やろう」という意味である。『平家物語』で(7)の対応文脈を見ると、(8)のようにタブが使われている。(8)の前後の文脈も「頼朝が宗清に所領を与えようと考えている」という主旨である。『ヘイケ』の用例(7)の文脈は(8)と同じであり、(7)のクダサルは現代語のヤルに相当すると確認できる。

(8) 「所知賜ばん」とて 『平家物語』 下 197 - 9

さらに、補助動詞用法に関して、『ヘイケ』では恩恵の受け手からの発話の用例が見られる。

(9) あう、弓手の腕を射させてござる：矢抜いてくだされいと申せば  
『ヘイケ』265 - 12

(9)は「小次郎」が「熊谷」に「(矢を)抜く」ことを懇願しており、「矢を抜いてください」という意味である。『ヘイケ』において、クダサルは物(恩恵)を求める場合「発話者=受け手」[用例(5) (6) (9)]と、物を提供する場合「発話者=与え手」[用

例(7)]に使われている。

一方、『エソポ』におけるクダサルは「発話者=受け手」の用例だけである。まず、本動詞用法に(10)(11)のような用例がある。

(10) 我にその半分を下されば、こしめす様を教へませうず  
『エソポ』449-19

(11) 籠を一つ下されば、お望みのままに魚を捕る調義を教へ申さうず」と  
『エソポ』466-8

(10)は「鳥」が「鷺」に対して自分の方向に「蝸牛の半分」を求めている。(11)は「狐→狼」の発話であり、発話者の「狐」が「籠」の受け手である。(11)は受け手が発話者になっていることが確かであるが、クダサルの主語が確定できない。(11)は「籠を一つ下されば」または「籠を一ついただければ」という意味である。

また、補助動詞用法に関しては、(12)のような用例が見られる。

(12) 憚りながら、療治して下されいと言へば、  
『エソポ』459-9

(12)は「馬」が「獅子王」に「療治する」ことを求めており、「療治してください」という意味である。『エソポ』ではクダサルは発話者が物(恩恵)を求める際に使われている。

両資料におけるクダサルの異同をまとめると、クダサルが物(恩恵)を求めるのに用いられている(現代語クダサル・イタダクかクダサルか不明・テクダサルの意味に相当する用例が含まれる)点では同じであるが、物を提供する用例(現代語ヤルの意味に相当する用例)は『ヘイケ』だけに見られる。

### 5.3. クレル

両資料において、クレルは本動詞用法の用例は見られるが、補助動詞用法の用例は見られない。(13)(14)は『ヘイケ』に見られる2例のクレルである。

(13) これは清盛の大唐から渡いて、秘藏してもたれたを重衡にくれられた、  
なをば松陰と申して  
『ヘイケ』295-7

(14) 時忠卿出やうて、いろいろすかいて、頼朝や、木曾に一味したならば、国をあげけう、郡をくれうなどと言ふをまことかと思つて、その豊後の国司

頼経が言うことに同心してわ悪しからうぞと、 『ヘイケ』203 - 2

(13) は重衡から上人への発話、松陰の由来を語る場面である。重衡は松陰の受け手であり、(13) は「大事にお持ちになったが重衡にくださった」という意味である。(13) の発話者は受け手であり、クレルは現代語クレルの意味に相当する。そして、(14) は時忠が平家を追放すると警告に来た野尻に対する発話である。「国をあげよう、郡をくれう」はそもそも頼朝側の発話のはずであり、授受関係者ではない第三者の時忠が引用している。『平家物語』では、(14) の対応文脈は(15) である。

(15) 当国の者ども、頼朝、義仲にかたらはれて、『しおほせたらば、国を預けん』『庄をとらせん』などといふことを、

『平家物語』 中 269 - 13

(14) と(15) は同じく、「頼朝や木曾に味方したならば、『国を預けよう』、『郡をやろう』などと言う」という意味の文脈である。よって、(14) のクレルは現代語ヤルの意味に相当する。

『エソポ』における6例のクレルはいずれも「発話者=受け手」の用例である。

(16) その辛労分にま一枝をば我にくれい 『エソポ』446 - 13

(17) 初めはくれうと言うたが、今はまた引き換へて 『エソポ』499 - 8

(16) 「獅子王→犬と狼と豹」の発話であり、「犬、狼、豹」から自分の方に肢を求めており、「もう一足を我にくれよ」という意味である。(17) は狼の心話文であり、クレルが助動詞「う」と一緒に使われていることが(14) の用例と同じである。(17) の6行前に「かまへて泣かば、狼にやらうず」という「母→小さい子」の発話が見られる。(17) は母の「狼にやらうず」という発話を信じた狼が、子供をもらえなかった時の発話である。(17) の「くれう」の部分は母が発話した「狼にやらうず」を言い直したところであり、「初めはくれると言ったのに」という意味である。

両資料におけるクレルは、「発話者=受け手」で現代語クレルの意味に相当する本動詞用法があるという点で共通しており、現代語ヤルの意味に相当する本動詞用法は『ヘイケ』だけに見られる。



#### 5.4. シンズル

『ヘイケ』においてシンズルは、「発話者=与え手」の本動詞用法と補助動詞用法の用例が見られる。(18)は本動詞用法「人をさしあげましょう」、(19)は補助動詞用法「申しひらいてさしあげましょう」という意味である。

- (18) それがしまづまかり上って人々にも申し合はせ、清盛の気色をもうかがうて、迎ひに人を進ぜうず。 『ヘイケ』75 - 14  
発話：少将→俊寛 「人」の移動：少将→俊寛
- (19) やがてまかりのぼって申しひらいて進ぜうず 『ヘイケ』145 - 22  
発話：文覚→頼朝 「申しひらく」恩恵の移動：文覚→頼朝

『エソボ』における1例のシンズルは、「発話者=与え手」の本動詞用法である。(20)は「一家の財宝をさしあげよう」という意味である。

- (20) 一家の財宝をことごとく賄路に進ぜうずと言へば 『エソボ』417 - 23  
発話：シャント→人 「賄路」の移動：シャント→人

両資料においてのシンズルの用法は、本動詞用法があるという点で共通している。また、異なるのは補助動詞用法が『ヘイケ』だけに見られることである。

#### 5.5. タテマツル

両資料においてタテマツルは、本動詞用法と補助動詞用法の用例がともに見られる。発話者はいずれも与え手であり、現代語サシアゲル、テサシアゲルの意味に相当する。

- (21) 去年の冬鎌倉を出たよりして、命をば鎌倉殿に奉る。 『ヘイケ』265 - 18  
発話：熊谷→平家側 「命」の移動：熊谷→鎌倉殿
- (22) それがしが勲功の賞に申しかえて奉らうと申したれば 『ヘイケ』274 - 11  
発話：猪俣→越中の前司 「申しかえる」恩恵の移動：猪俣→越中の前司

(21) (22)は『ヘイケ』の用例である。(21)は本動詞用法、「命を鎌倉殿にさし上げる」という意味である。(22)は補助動詞用法、「(御一家方々のお命を)私の勲功の賞に申し代えてさしあげよう」という意味である。次に挙げる(23) (24)は『エソボ』

の用例である。

- (23) お礼には名珠を牽らうずると言ふによって、 『エソポ』488 - 1  
発話：亀→鷲 「名珠」の移動：亀→鷲
- (24) 先年蒙った御恩を報じ牽らうずると言うて 『エソポ』452 - 16  
発話：鼠→獅子王 「報じる」恩恵の移動：鼠→獅子王

(23)は本動詞用法、「お礼には名珠をさしあげよう」という意味である。(24)は連用形接続形式の補助動詞用法用例であり、「蒙った恩を報じてさしあげよう」という意味である。

両資料におけるタテマツルの意味・用法においては相違点が見られない。

## 5. 6. タマワル

タマワルは『ヘイケ』に本動詞用法と補助動詞用法の用例が両方とも見られるが、『エソポ』には本動詞用法の用例だけが見られる。

『ヘイケ』におけるタマワルは「発話者=受け手」の用例しかない。(25)～(27)のタマワルは、それぞれ現代語クダサル、イタダク、テクダサルの意味に相当する。

- (25) 少将を急いで、これへたまはれと 『ヘイケ』56 - 24  
発話：清盛→宰相 「少将」の移動：宰相→清盛  
[現代語クダサルの意味に相当する]
- (26) いざ今度の勲功に樋口を申して、給はらうと言うて 『ヘイケ』250 - 19  
発話：児玉党の人→児玉党の人 「樋口(の命)」の移動：(院)→児玉党  
[現代語イタダクの意味に相当する]
- (27) 重衡が縁と思し召し出だいて、後生申うたまはれとあって 『ヘイケ』295 - 11  
発話：重衡→上人 「申う」恩恵の移動：上人→重衡  
[現代語テクダサルの意味に相当する]

一方、『エソポ』における2例のタマワルは命令形で使われ、現代語クダサルの意味に相当する用例である。

- (28) 我に当たる財宝をば暇として賜うれ 『エソポ』422 - 11

発話：妻→シャント 「財宝」の移動：シャント→妻

(29) その方より毎年宝を賜はれと書かれた 『エソポ』434-9

発話：ネテナボ帝王→リセロ国 「宝」の移動：リセロ国→ネテナボ帝王

タマワルは現代語クダサルの意味に相当する本動詞用法が両資料ともに見られる。現代語イタダクの意味に相当する本動詞用法、現代語テクダサルの意味に相当する補助動詞用法が見られるのは『ヘイケ』だけである。

## 5.7. トラス

『ヘイケ』におけるトラスは「発話者=与え手」の用例である。トラスは現代語ヤルの意味に相当する。

(30) 磨墨をとらするぞと仰せられて下された。 『ヘイケ』230-10

発話：鎌倉殿→梶原 「磨墨」の移動：鎌倉殿→梶原

『エソポ』におけるトラスは地の文の1例だけではあるが、現代語ヤルの意味に相当する点で『ヘイケ』と相違はない。

(31) 散々に嘲り、少しの食を取らせて、戻いた。 『エソポ』465-21

「食」の移動：蟻→蟬

## 5.8. マイラス

マイラスは『ヘイケ』においては本動詞用法と補助動詞用法の用例が見られるが、『エソポ』には本動詞用法の用例のみである。

『ヘイケ』におけるマイラスの本動詞用法の用例は受け手の発話に見られる。(32)は「おん馬を引いてくれよ」という意味である。

(32) 矢かき負ひ、おん馬参らせいと仰せらるれば 『ヘイケ』377-2

発話：義経→家来 「おん馬」の移動：家来→義経

補助動詞用法の場合に、現代語テクレルの意味に相当する用例と現代語テサシアゲルの意味に相当する用例が見られる。

- (33) 義経を謀って討って参らせいと 『ヘイケ』374 - 15  
発話：頼朝→昌尊 「討つ」恩恵の移動：昌尊→頼朝
- (34) いかにか花摘んで参らせうざる者も付き奉らぬか 『ヘイケ』397 - 6  
発話：法皇→尼公 「摘む」恩恵の移動：者(=女房)→女院

(33)は「討ってくれよ」、(34)は「花を摘んでさしあげる者」という意味である。

『エソボ』には3例のマイラスが見られる。マイラスは与え手の発話と受け手の発話に使われている。

- (35) その所に居住するエソボを参らせい。 『エソボ』428 - 20  
発話：リヂヤ国→サモの人々 「エソボ」の移動：サモの人々→リヂヤ国
- (36) 某の食ひ残いたをば、何として参らせうぞ? 『エソボ』466 - 7  
発話：狐→狼 「魚」の移動：狐→狼

(35)は「その所に居住するエソボをくれよ」、(36)は「私の食べ残しなので、どうしてさしあげましょうぞ」という意味である。

マイラスは現代語クレルの意味に相当する本動詞用法が両資料に見られる。現代語テクレル、テサシアゲルの意味に相当する補助動詞用法は『ヘイケ』に、現代語サシアゲルの意味に相当する本動詞用法は『エソボ』に見られる。

## 5.9. ヤル

『ヘイケ』には授受動詞として用いられたヤルが2例ある。2例とも本動詞用法である。1例は地の文に使われ、物の移動を描写している。1例は与え手の発話に用いられている。

- (37) 宗盛これもげにもぢゃと言うて、この三人を呼び出いて、暇をやるぞ：  
急いで下れと、言われたれば 『ヘイケ』190 - 3

(37)は「宗盛→(畠山の庄司小山田宇都宮らの)三人」の発話であり、「時間を与える、許す」という意味である。

一方、『エソボ』には授受動詞として用いられたヤルが6例ある。本動詞用法と補助動詞用法は各3例ある。本動詞用法の3例は、発話者が与え手であるのが2例、地の文に使われているのが1例である。

- (38) 「かまへて泣かば、狼にやらうず」と言ふによって 『エソボ』499 - 1

(38) は「母→小さい子」の発話であり、泣く子供に対し母が「泣くなら狼にやってしまうぞ」という文脈である。

また、ヤルの補助動詞の3例は地の文に用いられている。

- (39) エソボが智略をもつてたやすう開いてやり 『エソボ』432 - 15  
(40) たちまち赦いてやったれば、鼠は天の命を助かつて 『エソボ』452 - 9  
(41) そこで人々も大きに笑うて赦いてやれば 『エソボ』417 - 1

ヤルは「(手紙を)送る」「行かせる」などの実質的な動作の意味の用例もあり、(39)～(41)のヤルを、恩恵の移動を表す補助動詞用法ではなく、実質的な動作の意味で解釈する可能性もある。(39)～(41)だけを見ると、補助動詞用法と確定できない。ここで、古活字本『伊曾保物語』で(39)～(41)の対応箇所を確認してみると、(39)は『エソボ』と『伊曾保物語』との文脈が異なるため、対応していない。(40)(41)の対応箇所は(42)(43)のようになっている。

- (42) 「これほどの者共を失ひければとて、いかほどの事あるべきや」といひて、  
助け侍りき 『伊曾保物語』413 - 9  
(43) 「こさんなれ」とてゆるされける 『伊曾保物語』368 - 5

(42)(43)はそれぞれ「助け侍りき」「ゆるされける」になっており、「行かせる」のような表現はない。よって、(40)(41)の『エソボ』の文脈も古活字本『伊曾保物語』の(42)(43)と同じく、「行かせる」を含意していない可能性が高い。本稿では、(40)(41)のヤルは恩恵の移動を表し、補助動詞用法であると考え。ヤルの補助動詞用法の用例は(44)のように、『ヘイケ』『エソボ』と同時代の大蔵流狂言資料<sup>\*5</sup>でも会話文に多数見られる。

- (44) おりやうさまをたのふで、汝が名をかへてやらふとおもふが

---

\*5 使用テキスト：

池田広司・北原保雄(1972)『大蔵虎明本狂言集の研究 本文編』表現社

(44)のヤルは「行かせる」の意味が全く含まれておらず、文法化した用例である。(44)に比べ、(40) (41)は地の文の用例であるため、ヤルには「行かせる」の意味が残留している疑いもある。よって、(44)に比べ(40) (41)はヤル補助動詞用法の早い例であると言える。また、(39)に対しては、古活字本『伊曾保物語』に対応する箇所は見られなかったが、(40) (41)の用法から類推すると、(39)も補助動詞の用例ではないかと思われる。

両資料におけるヤルの意味と用法を比べると、補助動詞用法は『エソボ』だけに用例が見られる。

## 6. 両資料における授受動詞の使用状況の差異

前節では授受動詞ごとに『ヘイケ』『エソボ』での用例を確認した。各動詞の使用状況をまとめると、表2のようになる。「本」は本動詞用法、「補」は補助動詞用法を指す。用法の「本/補」の後ろに「受け手」、「与え手」、「第三者」(授受関係者ではない人物)、「地の文」と用例の発話者を記した。[ ]内は相当する現代語の意味を示した。

表2 『ヘイケ』『エソボ』における授受動詞の使用状態

	『ヘイケ』	『エソボ』
アタエル	本：受け手[クレル]	本：受け手[クレル] 本：与え手[アタエル]
クダサル	本：受け手[クダサル] 本：受け手 [クダサルまたはイタダクのどちらか] 本：与え手[ヤル] 補：受け手[テクダサル]	本：受け手[クダサル] 本：受け手 [クダサルまたはイタダクのどちらか] 補：受け手[テクダサル]
クレル	本：第三者[ヤル] 本：受け手[クレル]	本：受け手[クレル]
シンズル	本：与え手[サンアゲル] 補：与え手[テサンアゲル]	本：与え手[サンアゲル]
タテマツル	本：与え手[サンアゲル] 補：与え手[テサンアゲル]	本：与え手[サンアゲル] 補：与え手[テサンアゲル]

タマワル	本：受け手[クダサル] 本：受け手[イダダク] 補：受け手[クダサル]	本：受け手[クダサル]
トラス	本：与え手[ヤル]	本：地の文[ヤル]
マイラス	本：受け手[クレル] 補：与え手[イダダク] 補：受け手[クダサル]	本：受け手[クレル] 本：与え手[イダダク]
ヤル	本：与え手[ヤル]	本：与え手[ヤル] 補：地の文[イダダク]

両資料においてタテマツル、トラスの意味・用法には異同がない。アタエル、クダサル、クレル、シンズル、タマワル、マイラス、ヤルの意味・用法に差異が見られる。表2の塗りつぶした箇所は両資料の相違点である。全体的に見ると、授受動詞は『ヘイケ』における用法が『エソポ』より多いという印象を受ける。具体的に言うと、まず、古代語の授受動詞の語彙シンズル、タマワル、マイラスの用法は、『ヘイケ』では本動詞用法も補助動詞用法も見られるが、『エソポ』では本動詞用法しか見られない。三つの動詞はいずれも古代語の語彙であり、『エソポ』での用法を見ると積極的に使われていないように見える。また、クダサルに関して、「発話者＝与え手」[現代語ヤルの意味に相当する]用例は『ヘイケ』にあるが、『エソポ』にはない。一方、アタエル、ヤルのように『ヘイケ』より『エソポ』のほうに用法が豊富な授受動詞もある。

両資料におけるアタエル、クダサル、クレル、ヤルの用法を比べると、『ヘイケ』より『エソポ』のほうが現代語のアタエル、クダサル、クレル、ヤルの用法に近い。特に、クダサル・クレルは『ヘイケ』で「発話者＝受け手」物(恩恵)を求める時にも、「発話者＝与え手」物を提供する時にも用いられており、発話者や二格に置かれる人物に関して制限が見られない。発話者や二格に置かれる人物に関して制限が見られないことが、現代語「ヤル：クレル」の視点制約が成立する前のクダサル・クレルの用法の特徴である[古川(1995)(1996a)]。一方、クダサル・クレルは、『エソポ』では「発話者＝受け手」の物(恩恵)を求める用例だけで、発話者や二格に制限があるようになり、現代語クダサル・クレルの用法に近い。

このように、4節の授受動詞の用例の分布と5節6節で見てきた両資料における

授受動詞の意味・用法の異同から、現代語の授受動詞の語彙が用例数でも、意味・用法の面でも、『エソポ』における授受動詞の体系が『ヘイケ』より現代語の授受動詞の体系に近づいていると言えよう。

## 7. 終わりに

以上では、9種の授受動詞の用例数と用例の意味・用法について両資料間の異同を記述してきた。この異同の要因の一つは両資料間の分量の差であると考えられる。一方、分量に影響されず、アタエル、クレル、ヤルは『エソポ』での用例が多い。これは『ヘイケ』が鎌倉時代に成立・形成されてきた『平家物語』をもとにしていることが要因であろう。今後は、『ヘイケ』と百二十句本『平家物語』、『エソポ』と古活字本『伊曾保物語』との授受動詞用法の比較も進めていきたい。

## 参考文献

- 荻野千砂子 (2005) 「尊敬のタマハルと依頼形式テタモレについて」『純真紀要』46
- 荻野千砂子 (2006) 「クダサルの人称制約の成立に関して」『筑紫語学論叢 II』  
風間書房
- 荻野千砂子 (2007) 「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』第3巻3号
- 古川俊雄 (1995) 「授受動詞「くれる」「やる」の史的変遷」『広島大学教育学部紀要』  
第二部 44
- 古川俊雄 (1996a) 「日本語の授受動詞「下さる」の歴史的変遷」『広島大学教育学部  
紀要』 第二部 45
- 古川俊雄 (1996b) 「通時的観点から見た現代日本語における「くれる」の特殊用法」  
『広島大学日本語教育学科紀要』 6
- 古川俊雄 (1997) 「狂言資料における授与動詞「呉るる」「やる」の変遷」『広島大学  
日本語教育学科紀要』 7
- 小松英雄 (1998) 『日本語書記史原論』笠間書院
- 坪井美樹 (2005) 「テ形接続形式と文法化」『国語と国文学』82 - 11 東京大学国語  
国文学会



坪井美樹 (2007) 『日本語活用体系の変遷』増訂版 笠間書院

宮地裕 (1965) 「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について 『国語学』63

宮地裕 (1975) 「受給表現補助動詞「やる・くれる・もらう」発達の意味について」  
『鈴木知太郎博士古稀記念 国文学論攷』 桜楓社

宮地裕 (1981) 「敬語史論」『講座日本語学9 敬語史』 明治書院

吉田弥生 (2008) 「『天草版平家物語』の授受動詞－『百二十句本平家物語』との比較」『昭和女子大学大学院日本文学紀要』19 昭和女子大学

吉田弥生 (2010) 「授受動詞の変遷－中古から中世にかけて－」『学苑・日本文学紀要』 831 昭和女子大学

リ ショウ／人文社会科学研究科  
(2010年10月30日受理)